慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	清輔本古今集資料の一、二について
Sub Title	Study of Materials with Relevance to Fujiwara Kiyosuke's Kokinshu
Author	川上, 新一郎(Kawakami, Shinichiro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2002
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.37 (2002.) ,p.83- 124
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20020000-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

清輔本古今集資料の一、二について

川上新一郎

清輔本古今集の諸本とその異同については、既に拙著に述べたところであるが[1]、その後、一、二の資料を偶目することが出来た。今回はそれらについて考察したい。

一、家蔵零本

近時家蔵となった『古今和歌集』は文久四年（一八六四）の謄写本で仮名序及び巻一―三のみの零本であるが、保元二年清輔本の一本と推定され、既知の伝本の転写本でないことから、独立して考察する必要がある[2]。

家蔵本

存仮名序、巻一―三

文久四年（一八六四）謄写　　一冊

袋綴。茶色地藍色文様散表紙（二六・九×一八・四糎）。外題、左肩打付書「古今和歌集序春夏零」。料紙、薄葉紙。透写用のごく薄い料紙の裏写りを防止するため、同じ料紙を一片ずつ袋の芯に綴入れている。墨付、四四丁。遊紙なし。字面高さ、約一六・〇糎（歌本文、頭脚に勘物書入れ）。毎半葉十行書。和歌二行書。平仮名交り。内題、「古今和歌集巻第一（一―三）」、部立は内題の下に「春歌上」以下、春和哥下、夏歌とする。

第一丁ウに通宗の識語があり、

以二貫之自筆本一書写古今也／件本ハ於二皇太后宮一焼失畢云

〻／和哥等不レ似二餘本一、其説頗違矣　　通宗

とし、二丁オより仮名序にはいる（句読点、返点を私に付す。以下同じ）。

清輔本の特徴である頭脚の勘物を有するが、全巻墨筆のみであり、朱書の勘物の多くは省略し、一部は墨筆で書写している。

他の諸本に見られる新院御本との校異を示す朱傍記や朱の勘物は全くない。また声点もない。『新撰和歌集』入集歌であることを示す歌頭の合点は墨で付されている。

奥書は、終丁ウ左端に

右一巻者能勢賢高所蔵、有レ故借用／騰（ママ）写畢、于レ時文久六甲子歳正月　　（花押）

とある。

印記、巻頭巻尾に「和学講談所」（長方朱印）。

奥書の花押の人物及び奥書中の「能勢賢高」については知るところがない。また、和学講談所の印との関係も不明である。

なお、挿入された紙片に「枚原新右衛門様／番町須田三十郎内／□□□（ちとり？）」の文字があるが、本書との関係の有無は不明である。

本書は薄葉紙による透写本である。透写の技術はさして秀れているとも言い難いが、忠実に行われているようである。但し、頭脚の勘物については、内容を理解せぬまま細字の字体のみを模しており、他本と比較の上辛うじて判読しうる箇所が少なくない。また、新院御本との校異や頭脚注の朱書をほとんど欠く点は、底本にすでに欠いていたのか、透写の際省略したのか（この場合、意図的に省略したとも、朱書は後に書入れるつもりでそのままになったとも考えられる）、様々な場合が考えられるが、いずれとも明らかでない。

一方、本書には、墨による傍記本文がまま見られるが、それらはほとんど定家本に一致している。いずれの時にか定家本と校合して書入れたものと思われる。

なお、本書の底本は透写の字配りを見るかぎりでは相当の古写本であることがうかがわれ、鎌倉期の写本かと思われる。

異本歌並びに排列は巻一―三の部分において以下のようになっている。異本歌は片仮名本行で一行書きされ、「見二合或本一有二此哥一」などと墨注記するが、他の諸本に存する朱注「無二御本一」はない。

80ノ次、異本歌1あり。歌頭に墨合点を施し、「見二合或本一

有二此哥一」と頭注する。

サクラノヤリミヅニチリケルヲ　　貫之

ユクミヅニカゼノフキイル、サクラバナキエズナガル、ユキカトゾミル

82ノ次、異本歌2あり。合点なく、「或本有二此哥一」と頭注する。

雲林院（ママ）マカリテサクラノチリケルニヨメル

ユキトミテヌレモヤスルトサクラバナチルニタモトヲカヅキツルカナ

83 86 84 85の排列をとる。

以上はいずれも清輔本の特徴に一致しており、巻頭の通宗識語や頭脚の勘物からも清輔本であることは明白である。さらに、勘物の内容の検討から保元二年本に属すると推定される。その一、二を左に掲げる。

まず、各巻巻頭の巻ごとの歌数の表示形式は本書では以下のごとくになっている。

巻一

歌六十八ゝ、此中返哥一首

巻二

歌六十六首、其外他本哥二首勘二入之一、已上貫之哥

巻三巻頭は後述するように底本が補写と見られるので、ここでは除外する。

以上、巻一、巻二の歌数の表示は保元二年本もしくは仁平四年本と推定される曼殊院本と一致している。永治二年本である宮本家本はそれぞれ「春上六十八首」「春下六十六首、但御本ニハ六十四首也、（以下朱）此外他本哥二首カキ入ラレタリ」とあり、顕昭本はそれぞれ「春上六十八首」「春下六十六首、（以下朱）此外他本哥二首カキ入ラレタリ（以下墨）已上貫之哥」（天理本による、伏見宮本欠）とあっていずれも異っていることがわかる。

さらに、作者勘物の入集歌数の記載方法により弁別する方法は拙著153頁に述べたが、それを当てはめると以下の通りである。

本書の作者勘物は、初出の箇所に付注され、原則として全ての歌人に入集歌数を記入し、なおかつそれを勘物冒頭に記載している。一方、初期の清輔本と見られる天理図書館片仮名本と顕昭本は入集歌数を記載しない。静嘉堂寛親本と永治二年本である宮本家本は入集歌数を勘物末尾に記載するが全ての歌人にわたるわけではない。仁平四年本と見られる曼殊院本は全ての

歌人に記載するが、位置は冒頭、末尾等一定しない。

以上の点を比較すると、本書の作者勘物の記載方法は保元二年本に一致しており、本書を保元二年本の一本と認定して差支えないと考える。[3]

さて、本書本文の特徴を検討する前に解決すべき問題がある。それは、巻三巻頭内題より二丁分、135－146上句にあたる部分が頭脚の勘物に至るまで全て定家様で書写されていて、その他の部分が例えば為氏筆などと極められそうな字体であるのと字様を異にしている点である。

さらに、本文その他も保元二年清輔本とするには不審な点が多い。そこで、該当部分を左に翻刻する。

古今和謌集巻第三　夏歌

だいしらず　　よみ人しらず

135わがやどのいけの藤なみさきにけり／山ほとゝぎすいつかきなかん

この哥ある人のいはく柿下人麿がなり

う月にさけるさくらをみてよめる

紀としさだ

136あはれてふことをあまたにやらじとや／春にをくれてひとりさくらん

だいしらず　　よみびとしらず」

137五月まつやまほとゝぎすうちはぶき／いまもなかなんこぞのふるごゑ

伊勢

138さ月こばなきもふりなんほとゝぎす／まだしきほどのこゑをきかばや

よみ人しらず

139さつきまつはなたち花のかをかげば／むかしの人のそでのかぞする

140いつのまにさ月きぬらんあしびきの」やまほとゝぎすいまぞなくなる

141けさきなきいまだたびなるほとゝぎす／はなたちばなにやどはからなん

をとは山をこえける時にほとゝぎすの／なくをきゝてよめる

紀とものり

142をとは山けさこえくればほとゝぎす／こずゑはるかにいまぞ

なくなる
ほと、ぎすのはじめてなきけるをき、て／よめる
そせい」
143ほと、ぎすはつこゑきけばあぢきなく／ぬしさだまらぬこひ
せらるはた
ならのいそのかみでらにてほと、ぎすの／なくをよめる
144いそのかみふるきみやこのほと、ぎす／こゑばかりこそむか
しなりけれ
だいしらず　よみびとしらず
145夏山になくほと、ぎすこ、ろあらば／ものおもふわれにこゑ
なきかせそ
146ほと、ぎすなく声きけばわかれにし」
（以下146下句次丁初行に連続する）
〔内題頭注〕
夏哥卅四首
〔135頭注〕
万葉久米広縄哥
ふぢなみのしげりはすぎぬあしびきのやまほと、ぎすなどか
きなかぬ
〔135脚注〕
万葉
あさがすみたなびくのべにあしびきのやまほと、ぎすいつか
きなかん
〔136頭注〕
別
〔137頭注〕
在二猿丸集一
詞云　別
うづきのつごもりにほと、ぎすをまつとてよめる
〔139頭注〕
在二伊勢集一　別
〔143脚注〕
万葉云
こひしなばこひもしねとやほと、ぎすもの思ふときにきなき
とよます
〔145頭注〕
万葉云
やまとにはなきてかくらんほと、ぎすながなくごとになきひ

とおもほゆ

まず、古今集本文を検討する。部立を内題下に書く形式は清輔本に一致している。

しかしながら、本文にうつると、清輔本と一致しない点が以下のごとくにある。上段が本書、下段が通常の清輔本（尊経閣文庫本による）である。新院御本との校異を示す朱傍記は本書にはないので無視する。

135左注　柿下人麿かなり－かきのもとの人丸かうた也

136詞　さくらをみてよめる－さくらをよめりける

138　またしきほとの－またしきときの

140　さ月きぬらん－さつき、つらん

141　けさきなき－けさきなく

144　いそのかみてらにて－いそのかみのてらにて

わずか二丁の間に六箇所もあるのは異常である。また、保元二年本以外の清輔本に範囲を広げても、該箇所の本文が一致する伝本はほとんどない。わずかに136詞書「よめりける」が天理顕昭本と右衛門切に「よめる」とあるのみである（伏見宮顕昭本は144上句まで落丁）。さらに、六条家本が上記一箇所の他、138「またしきほとの」、144詞書「いそのかみてらに（「て」ナシ）」とあるのが指摘出来るくらいである。

実は本書のこの異同は清輔本諸本に関わるものではなく、定家本であるがゆえの異同である。異同箇所として掲げた箇所はもとより、この二丁の間の本文は定家本に全同である。[4] 従ってこの部分は単に底本の筆跡が異なるのみでなく、定家本による補写と言わざるをえない。しかも、内題の書式や一面の行数、和歌を二行書にしてちょうど二丁に収めている点を考慮すると、意図的な操作が行なわれていることになる。

そのような目で見るとこの間（135－146）『新撰和歌集』入集を示す歌頭の合点が一箇所もないのはその故かと納得出来る（保元二年本なら、135 137 138 139 144に付されるのが通例である）。

すると、頭脚の勘物は本来のものではないことになる。案の定、検討すると、保元二年清輔本の勘物としては不審な点が散見される。

まず、内題の頭注「夏哥卅四首」が不審である。保元二年本であるなら「歌卅四首」とあるべきである。「夏哥卅四首」は永治二年本である宮本家本もしくは顕昭本の書式である。[5]

次に、135頭注「万葉久米広縄哥云々」と135脚注「万葉　あさ

がすみ云々」は保元二年本には見えないところで、この勘物を有するのは顕昭本のみである。

以下、順に並べると、136頭注に「別」とのみあり、紀利貞に関する勘物を欠くのも顕昭本に一致し、137頭注において「別」とあるのも顕昭本のみで、「別」の一字が「在二猿丸集一詞云」の次に割込むように書かれている字配りまで一致する。139頭注が「在二伊勢集一　別」と「別」一字があるのも顕昭本のみ（但し、諸本に存する「伊勢語云」以下『伊勢物語』の長文の引用を本書は欠いている）。141において「在二伊勢集一」の勘物を欠くのは本書と宮本家本と顕昭本のみ。143において「万葉云」の勘物のみで「別」の記載を欠くのは本書のみの異同である。145の勘物は諸本共通である。

以上をまとめると、139143二箇所において独自の異同があるが、その他は顕昭本の特徴とことごとく一致し、この部分の勘物が顕昭本に発していることは明かである。

こうして二丁分の欠落を別本により補写したことが判明したが、いかなる理由で本文は定家本により、勘物は顕昭本によったのか、その間の事情は不明である。そもそも本文、勘物ともに定家様で書かれている理由も推測し難い。書式を他の部分にそろえているにもかかわらず、定家様とするのは理解し難い。最初、本文部分を定家筆もしくは定家様の伝本で補写し、次いで、清輔本らしき勘物を有する伝本から勘物を書入れ、その際、本行部分にあわせて勘物も定家様にしたのであろうか。その勘物がたまたま顕昭本だったというのであろうか。ともあれ、本書巻三巻頭二丁は、以上のごとく定家本本文に顕昭本勘物を書入れた補写と認定される。

なお、以上の補写は本書において行われたとも、本書の底本で既にそうなっていたともいずれとも考えられ明らかでないが、強いて言えば後者の可能性が高いのではあるまいか。

以下に本書の特徴的な異文を掲げる。上段が本書、下段が尊経閣文庫本（清輔本を代表しえない場合は注記する）である。その場合、本書と一致する清輔本がある場合は、本書本文の下、括弧内に略号で示すこととする。なお、本書は新院御本との校異を省略しているので比較の対象は本行のみとする。

仮名序、巻一―三を存する伝本は左のごとくである。

清輔本

永治二年本―宮本家蔵伝二条為氏筆本（宮）

仁平四年本

付、曼殊院蔵本（存仮名序、巻一―八、曼）

保元二年本―尊経閣文庫蔵伝清輔筆本（尊）、穂久邇文庫蔵伝世尊寺経朝筆本（存仮名序、巻一―十、穂）、金沢文庫蔵本（存巻一、二、金）

顕昭本

宮内庁書陵部蔵伏見宮旧蔵伝顕昭筆本（伏）、天理図書館蔵伝藤原家隆筆本（天）

仮名序古注　これはもしのかすも（天）―これらはもしのかすも、同　からうたも（宮「からうたも」）―からのうたも、同　そへたてまつるうた―そへたてまつれるうた、同古注　このこゝろえかたし（宮穂）―そのこゝろえかたし、同　ほにいたすへきにも（宮穂）―ほにいたすへき。にも、同　しきのはねかきかそへ―しきのはねかきをかそへ、同　山へのあか人（穂伏）―山のへのあか人、同古注　むのはなそれともみえす―むめの花それともみえす、同　いにしへのことをもしれる人―いにしへのことをもうたをもしれる人、同古注　たまともぬける―たまにもぬける、同古注　あらしてふらん―あらしといふらん、同　たきゝをつる―たきゝおへる、同古注　思てゝこひしき時は―おもひいてゝこひしき時は、同　ふりにしことをも（定家本に一致）―ふりにしことを、同　御書のあつかり（穂伏天）―御書のところのあつかり、同　春夏あき冬にもいらぬ（曼伏天、定家本も一致）―春夏秋ふゆともいはぬ、同　えらはせたまける（穂伏天）―えらはせたまひける、同　いまあすかゝは―いまはあすかゝは（尊「いまは」の「は」墨補入）、同　いはほとなるへき―いはほとなる、同　まくらことはゝ―まくらことはに、同　あきのよのなかき―秋のよのなかきを、6　きにふりかゝれるをみて（曼穂）―ふりかゝれるを、8　かしらに―ゆきのかしらに、13　しるへきにはやる―しるへにはやる、22　おほられし―おほせられし、24　哥合によめる（曼穂）―うたあわせに、40　むめのはな（宮伏）―むめのはなを、41　はるのよむめのはなを（穂伏天、定家本も一致）―はるのよのむめの花を、42　ひさしく（定家本に一致）―ひさしう、同　やとられて―やとらて、52　さくらのはな（穂伏天）―さくらのはなを、同　さきの大きおほいまうちきみ（曼伏、定家本も一致）―さきのおほいまうちきみ、62　よめる（尊）―よみける、巻二部立　春和哥下（尊穂）―春哥下、72　たひね

しつへし－たひねしぬへし、76　かせのありかは－風のやとりは、78　あひしりける人の（曼穂伏）－あひしりて侍ける人の、同　「はなにさして」ナシ（曼穂伏）、80　わつらひける時に（穂伏）－わつらひはへりける時に、82　さくちる（ママ）をよみける－とくちりはへりけるをみてよみける（尊、諸本異文多し）、異本歌2　雲林院－雲林院に、85　とうく（宮）－東宮、92　きさいのはや（ママ）－きさいの宮、95　まかりける（穂金伏）－まかれりける、103　もとかた（曼穂伏）－ありはらのもとかた、106　てたにふれつる（た）－てたにふれたる、114　こゝろもいとに（は）－こゝろもいとに、115　女ともの（曼穂）－女の、120　ふちのはな－ふちのはなの

以上を概括すると、やや誤写が多い気がするが、保元二年清輔本として特に不都合とも異色とも言えるような点はない。

最後に勘物のうち、諸本とやや異なる点を挙げることとする。

仮名序の「延喜五年四月十八日に大内きゝのとものり云々」に対する長大な勘物があるが、そこに次のような字句を含むのは、他には尊経閣文庫本のみである。

重案レ之二人ゝに召二古哥一事ハ以前也、不レ注レ之、各可レ進之哥ヲ今（合）テ令レ撰ル、初日四月十八日ニテ有欤、貫之集詞叶二此議一欤

また、本文でよみ人しらずの勘物を何番歌に付すかは諸本で異なり、宮本家本、曼殊院本は7番歌に、尊経閣文庫本、穂久邇文庫本は14番歌に付すのに対し、本書はそれを以下のように3番歌に付している（顕昭本にはこの種の勘物なし）。

〔頭注〕無名哥惣数目六無二相違一、但春下無二一ゝ一、恋一一首加、自余部無二相違一

〔脚注〕不知人哥四百五十四首、中著□（着レ注）作人十三人、短哥一ゝ、旋頭一ゝ

二、福井市立図書館蔵本

本書は清輔本ではなく、貞応二年定家本に保元二年清輔本を校合し、その目録と奥書を移記したものである。昭和五十四年に刊行された福井市立図書館の『和漢古書分類目録』（長沢規矩也氏編）に書影が掲げられているが、清輔本との校合については言及されていない。稿者は国文学研究資料館のマイクロフィルムによって気づかれた浅田徹氏の御指摘で知ったものである。その後、原本の調査を遂げることが出来たので、ここに報告したい。

福井市立図書館蔵本（五－三二七別）

文明六年（一四七四）行阿書写校合・文明十八年（一四八六）妙阿相伝奥書　三冊

袋綴。後補青・朽葉色花卉唐草文緞子表紙（二〇・二×一三・〇糎）。背を金襴で包む。外題なし。見返し、金切箔散鳥の子。料紙、薄手斐楮交漉紙。分冊は、第一冊、仮名序、巻一－六、第二冊、巻七－十六、第三冊、巻十七－二十、真名序、奥書となっている。墨付、第一冊、六八丁、第二冊、七五丁、第三冊、六七丁。遊紙、第三冊、巻二十（墨滅歌）末に一丁、その他なし。字面高さ、約一六・七糎（歌本文）。毎半葉、仮名序七行、本文八行、真名序五行。和歌一行書。平仮名交り。内題、「古今和歌集巻第一（－二十）」。清輔本及び嘉禄本との校合があるが、それについては後述する。

奥書は校合本からも転記しており、複雑である。(6)

巻末真名序に続いて、まず、底本の奥書である貞応本奥書Aがある（以下A～Kは説明の都合上私に付した）。

A此集家々所レ称雖二説々多一且任二師説一又加二／了見一、為レ備二後学之證本一不レ顧二老眼之不／堪一手自書レ之、近代僻案之好士以二書生之／失錯一称二有識之秘事一、可レ謂二道之魔姓一、不レ可レ／存二自他之差別、志同者可レ随レ之

貞応二年七月廿二日癸亥戸部尚書藤判」

同廿八日令二読合一訖、書二入落字一了

伝二于嫡孫一可レ為二将来之證本一

可レ為二末代證本一之故以二参議定家／自筆本一所レ令二書写校合一也

於二勘物一者少〻加之ニ

次に半葉を隔てて校合本である清輔本の目録（尊経閣文庫本と同様のもの）六丁半余りがあり、更に次のような奥書群がある。

B此本従二坊御時一召二籠内裏一数年之後平／治元年七月九日返二預之一、仰曰、此本披露／無レ由思食、仍合二三帖一賜レ之、夢不レ可レ借二与／他人一之由云〻、仍弥秘レ之、以二若狭守通宗朝臣一自筆本一書古今也、文字仕不レ遠二彼件本一／僧隆縁為二彼朝臣外孫一所二相伝一也、端書文／彼朝臣筆也云〻、片仮名書入歌等同彼人／所二考入一也、件古今貫之自筆小野皇大／后宮御本之流也、於二上下考物一者管見之／所レ及予所二

記付一也、真名序又以同前、後日校合社院(ママ)御本、朱筆彼御本説也、件／御本ハ貫之妹自筆本書写古今云々、（或説件本貫）」

（之妹自筆云々）、但有二序注一、少入有疑(ママ)殆(ママ)、件正本ハ閑院／贈大政大臣本云々、転々在二故花園左府御／許一、又陽明門院御本説間々注二付之一、大略／不レ遠二此本一、件本貫之自筆延喜御本云々／後顕綱朝臣給預、其後転々於二公信朝臣／許一焼失畢、若州号二讃州入道本一此本也／如レ此古今二箇度書二写之一、而為二難レ去人一」被二収公一畢、保元二年五月比更以書二写之一／至二今度一深秘二筥中一死後可二左右一而已

和歌得業生清輔

C書本云、建永二年(一二〇七)十月廿七日以二聖護院／宮御本一書写、件本三従(ママ)大進清輔／朝臣本書写古今、仍自二目録一奥彼朝臣」所為也、然者雖レ不レ及二書写一為レ散二後不審一／書二写之一、大都秘蔵本也

権中納言在判

D

E元徳三年(一三三一)姑(三月)洗廿日鬻レ書女令(ママ)戈(交?)易／実孝卿本顕然之間被レ止畢」

桑門昭忠

F　相伝畢

参議源朝臣有光

G先人奥書本焼失了、此本猶貽」住吉玉津嶋擁護欤、可レ秘可レ仰云々

斯本勘物等神也妙也／更不レ可レ出二圃(園)外一者哉

散木卿源朝臣在判」

D′両帖之本ノ批第十之奥ノ分寛元四年(一二四六)十一月五日以二御本一／書写畢

権中納言実孝

E′元徳三年姑洗廿日／不慮感得畢」

和哥浦前司在判

F′

参議右近衛権中将源朝臣在判

G′梅雨中加二一見一畢

散樗卿源朝臣在判」

H右以二実孝卿御本一文明(一四七四)第六之／暦(五)甲午梅月中八之夕校合畢、後覧／為二支證一批令レ模二写之一、朱墨両点右／異彼本説也

南山喰霞貧士行阿（花押）」

I此集家々所レ称雖二説々多一且任二師説一／又加二了見一為レ備二後学之證本一手自／書レ之、近代僻案之輩以二書生失錯一／称二有識之秘事一、可レ謂二道之魔姓一／不レ可レ用レ之、但如レ此

用捨只可レ随二其／身之所レ好、不レ可レ存二自他之差別一／志同者可レ用レ之」

嘉禄二年四月九日戸部尚書判

于レ時頽齢六十五寧堪二右筆一哉

此本付二属大夫為相一在判

J文明六年（甲午）閼逢敦牂風温廿七日以二右近中将／為相御本一一校、声并左異等悉此／本之説、為二末学一批写留二早」

行阿（花押）

（以下別筆）

K文明十八年丙午（八月）南呂廿三日

相伝了　妙阿（花押）

本文に朱墨合点、朱声点を付す。印記なし。

さて、奥書の検討にうつる。

本書底本の奥書はAで、本書は貞応二年七月廿二日定家奥書本である。この点は本文からも確認される。例えば、巻一、18 19の箇所が「み山には松の雪だに消なくに宮こはのべのわかなつみけり」「春日野のとぶ火の丶もりいで丶みよ今いくかありてわかなつみてん」と通常とは逆の排列となる点など所謂貞応本の特徴を示している。

次にB～Gは第一の校合本である保元二年清輔本の巻二十末に付された奥書で、D′～G′は注記のごとく、清輔本の巻十末奥書をここに移記したものである。[7] 巻二十末のD～Gと巻十末のD′～G′がそれぞれ対応している。

文明六年の年記を持つHが保元二年清輔本を校合した際の行阿（伝未詳）の校合奥書である。従って、厳密に言えば、行阿が貞応本を書写したのは校合以前のいずれの時点であってもよいことになるが、次の嘉禄本の校合が近接して行われていることからも、本書の書写年時が校合を大きく遡るとも思われず、文明六年書写校合本と称してよいであろう。

Iは、保元二年清輔本に次いで校合された嘉禄二年定家奥書本の奥書、Jがその際の行阿の校合奥書、Kのみが別筆で妙阿（これまた伝未詳）の相伝奥書である。

本書奥書の概略は右のようで誤らないと考えるが、細部にわたると不明な点がある。順に検討する。

Aの貞応本奥書、Bの保元二年清輔奥書は後者に誤写と覚しき箇所があるが問題ない。念のために言えば、保元二年清輔奥書には、尊経閣文庫本以下多くに共通のものと、それとやや異なる伏見宮旧蔵一本のものとがあるが、Bは前者である。[8]

CDはこのまま見れば、Cの奥書を加えたのはDの「権中納

言」のように思えるが、D′によれば、「権中納言」は徳大寺実孝（永仁元－元亨二、一二九三－一三二二、三〇歳）であるから、建永二年（一二〇七）奥書の記主にはなりえず、CとDは別の奥書となる。C奥書の記主は不明である。またC奥書中に見える「聖護院宮」「大都」も何人か不詳。

Dに対応するD′奥書により、本書に校合された清輔本は寛元四年徳大寺実孝書写本であったことが判明する（追記）（実孝書写本そのものであったか否かは後に検討する）。実孝は公孝男で勅撰集歌人（新千載集に一首入集）ではあるが、早世したこともあり、目立った和歌事蹟はなく、どのような経緯で清輔本古今集を書写するに至ったかは明らかでない。

次いで、元徳三年桑門昭忠の感得奥書がある。E及びE′がそれである。署名はEが「桑門昭忠」、E′が「和哥浦前司在判」と異なるのは不審であるが、年月日が同一であり、同一人と考えたい。しかし、昭忠が何人かは不明である。E奥書が難読で意が取れないこともあって、状況が明らかでない。しいて推読すれば、書をひさぐ女より購得したというのではあるまいか。実孝書写本であることが明らかであるので、是非にと思って求めたと言うのであろう。昭忠は徳大寺実孝ゆかりの者と解されなくもないが、なお、不明とするべきであろう。また、「止畢」でなく「被止畢」とあることから、購得したのは昭忠自身ではなく身分の高い何人かの指示によったもの（それが和哥浦前司）と考えられなくもないが、それ程神経質になる必要もなかろう。いずれにしても、E及びE′は実孝書写本に追記された感得奥書である。

更に、F及びF′奥書は実孝書写本を相伝した源有光の奥書である。源有光は六条有忠男、延慶三年（一三一〇）生、延文二年（一三五七）四月薨、四十八歳（没年月は『常楽記』による）。F′奥書は「参議右近衛権中将」とあるので、元徳三年（一三三一）八月より暦応元年（一三三八）十二月もしくは暦応五年三月より翌康永二年八月の間のこととなる。この年代はE及びE′奥書の元徳三年に近接していることにより、実孝書写本は昭忠から有光に直接相伝された可能性が高い。しかしながらその間の経緯は不明である。

また、G及びG′奥書の「散木卿源朝臣」「散樗卿源朝臣」も源有光であろう。有光は康永三年（一三四四）十二月に権中納言を辞して以後散位であったので、その間にG及びG′奥書を記したのであろう。G奥書によれば、有光は父有忠奥書の古今集

を所持していたが、それは焼失させてしまい、実孝書写本は助かったとのことである。「斯本勘物等神也妙也」とあるのは清輔本の勘物をさしていると考えられる。

そして、H奥書により、A奥書を有する貞応二年定家本にB～G奥書を巻末に、D′～G′奥書を巻十末に有する保元二年清輔本を文明六年五月に行阿が校合したのが本書であることがわかる。「後覧為支證批令模写之」は「後覧の支證の為め、批はこれを模写せしむ」と訓んで、「後の人に実孝書写本が本物であったことを示すための証拠として、批（奥書）は模写した」の意であろう。本書の清輔本巻末の目録とB～G′奥書はそれ以前の本文及びA奥書ならびに以降のH～J奥書と若干書体を異にしていることをその証とする考えもあろう。

しかしながら、行阿が校合に用いた清輔本が実孝書写本そのものであるとするには疑わしい点がある。

第一に、奥書部分は模写したと言いながら、奥書DGE′F′G′に「在判」の文字があるのは不審で、当然花押は模写されねばならない。これは行阿の用いた本が転写本ですでに「在判」とあったと考えるべきであろう。

第二に奥書EFGとE′F′G′はいずれも実孝書写本に加証された奥書であるから、それぞれが異った筆蹟でなければならないのに、必ずしもそのようには見えず、実孝奥書以下が（模写で見る限り）一筆のようである。

結局、行阿は実孝書写本と考えたようであるが、実際は転写本だったのであろう。

また「朱墨両点右異彼本説也」とは校異の書入から帰納すると、朱墨の合点と「〇〇ィ」と「イ」文字を右よせして記した異同は、実孝書写本との校異であるの意と思われる。

行阿は次いで同年I奥書を有する嘉禄二年定家奥書本で校合し、その結果は「声并左異等悉此本之説」とあるが、これも帰納すると声点と「〇〇ィ」と「イ」文字を左よせにした校異がそれに該当するということになる。なお、「閼逢」は甲、「敦牂」は午でよいとして、「風温廿七日」の「風温」は月の異名とも思われず、単に風あたたかにしての意で、月はH奥書をうけて五月と解すべきであろうか。更に、「為末学批写留了」は、「末学のため、批（I奥書）は写し留めおわんぬ」で、またしても「批」を奥書の意に用いている。

ここまでが、本文の書写を含めて全て行阿の筆で、Kが本書を相伝した妙阿の相伝奥書である。

以上のごとくほぼ奥書は読解しえたが、伝未詳の人名が多く、伝来経路は不明の点が残る。行阿はH奥書で「南山喰霞貧士」と名のっているので、高野の僧（または隠者で）本書は高野に伝来したのであろうか。

また、本書が文明六年校合本そのものであることが明らかになったことにより、校異も相当程度信頼しうると考えられる。校異の方針については、奥書によって一部をうかがうことが出来るが、多くは帰納して考えねばならない。不明な点もあるが、大体次のようになっていると思われる。

一、和歌の有無や排列は無視して注記しない。従って、貞応本と嘉禄本の排列が異なる19「み山には」18「春日野の」の箇所はもとより、清輔本の異本歌等についても何ら言及がない。

二、本文の校異はかなり丁寧に注記する。基本的に右傍に注記するが、奥書にあるように、最初清輔本、次いで嘉禄本の順に施されている。本文の異同は、清輔本は「〇〇ィ」のように「イ」文字を右よせに、嘉禄本は「〇〇ィ」のように「イ」文字を左よせにして区別する。両者が一致して底本である貞応本と異なる場合は「〇〇イ」とする。清輔本に加えられている新院御本による朱の注記は、片仮名書きのまま「〇〇ィ」として清輔本本行と区別する（墨書）。まれに校異の下に「イ」が三行割になっている場合があるが、その意味は不明。あるいは新院御本が校合二本と同じであることを念押しする表記かもしれない。なお、校異で対応する本文がわかりにくい場合、対応箇所に傍線と「イ」を施し、更めて校異を記すこともある。

三、校合本において本文が加わる場合は補入して「イ」とし、本文が欠ける場合は右傍線を施して「イ」とする。「イ」の左右のよせ方で区別するのは同様である。

四、清輔本の勘物は基本的に書き入れない。一方、嘉禄本の作者注記で貞応本にくらべて独自のものは書き入れて、同じく左よせ「イ」とする。

五、声点は朱で施す。清輔本は基本的には声点はないので、これは定家本のものと認められる。J奥書によれば、声点は嘉禄本によって後に施されたことになるが、底本である貞応本になかったか否か明らかでない。ただし、本書の声点が貞応本より多く嘉禄本に近いことは認められそうである。

六、清輔本に施されている『新撰和歌集』入集を示す歌頭の墨合点と清輔本中、尊経閣文庫本など一部の伝本に見られる作

者の右肩に加える朱合点は移記されている。一方、嘉禄本には声点を加えた箇所や声点は加えなくとも声点が問題となりそうな箇所に朱合点を加える性格があるが、本書はこれも移記している。こうして、本書には清輔本による朱墨合点と嘉禄本による朱合点が併せて施されまぎらわしい。そこで、後者の朱合点には原則として墨で左よせ「イ」文字を添えて区別する。[9]

以下本書の書入れのうち、本文校異部分を中心に列挙してみる。上段に前後の底本本文、下段に校異を出来るだけ表記を変えずに示す。補入は補入箇所に。印を付し（書写面も概ねそうなっている）、下段に補入の文章を示す。清輔本と嘉禄本の区別は「イ」の左右よせで示す。欠けている字句については前後の底本本文をカギカッコでくくって示し、その下に欠けた箇所（傍線を引かれた箇所）を「〇〇イ」の左右よせで区別する。ただし、前後の文章を示さなくとも該当箇所が明らかな場合「〇〇イ」のみとした場合がある。書写面ではいずれも本行に右傍線があり、その傍線の下に左右よせで「イ」としているが、印刷面が煩雑になるため傍線を省略して表記している。注意されたい。意味不明、理解不能の校異もそのまま示す。

仮名序　ものゝふのこゝろをも｜なかをもィ、同古注　なりたまへることをいへる｜たまへるをいへるィ、同　つたはることは｜はれるィ、同古注　ひめとは｜ひめはィ、同古注　をかたにゝうつりて｜かたにうつりてィ、同　つちにしてはすさのを｜してすさのィ、同　すなほにして｜にてィ、同　人の世となりて。｜よりそィ、同　すさのをのみことより。｜そィ、同古注　「このかみなり」の「なィ」（ママ、「なりィ」か）、同古注　みやつくりし給とき。｜にイ、同古注　王仁と｜わうにとィ、同古注　「この花はむめの花をいふなるへし此句無しィ」、同古注　事をろそかなりて｜とてイ、同　からのうたにも｜もィ、同　「むくさ」の「さィ」（ママ）、同　「そへたてまつれるうた」の「れィ」、同古注　たとへなともせぬ物也｜ことィ、同古注　かくれたる所｜かはりたる所ィ、同古注　そへうたとおなしやうなれは｜かはりたる所かへたるなるへしィ（ママ、対応箇所不明）、同　とのつくりせりといへる。｜ことのたくひィ、同古注　見えすなんあり｜るイ、同古注　神そしるらん｜やィ、同古注　わかれんことは。｜えイ、同　いろこのみのいへに。｜のみィ、同　かゝるへく。｜もィ、同　「こゝろ〳〵をみたまひて」の「てィ」、同　さかし。｜くィ、同　「さゝれいしに」の「さゝれィ」、同　「松虫」

の「松ィ」、同　水のあわ。をーはィ（「わ」の校異）・トィ、同
さかえーへィ、同　「世にわひィ」、同　哥にのみそ心を。ーはィ、同　「つたはるうちにも」の「もィ」、同　「ならの御時」に「天武天皇ィ」傍書、同　おほき。みつのくらゐーみィ、同
「もみちをは」の「をィ」、同　にしき。とーかィ、同　み。ーえィ、同　「みたまひ」の「たまひィ」、同　「よしの丶山」の「丶ィ」、同　人まろか心にはーめィ、同　雲かと。ーそィ、同
「雲かとのみなん」の「のみなんィ」、同　「くれ竹の世丶に」の「丶ィ」、同　たえすそーかたくなんィ、同　これよりーかゝりけるィ、同　さきー（傍書）さき不審未決（朱合点に「ィ」）、同　あつめてーはせィ（「つめ」の校異）、同　「ふたり也きしかあれと」の「きしかあれとィ」、同　たかひになんありーるィ、同　かの御時よりーとしィ、同　「たかき人をは」の「人ィ」、同　たや。きーすィ、同　「僧正遍昭」の「僧正ィ」、同　哥のさまはーこゝろィ、同　をうなをみてーおもひィ、同古注　なにかはーとィ（「に」の校異）、同古注　「さかのにて」の「てィ」、同　「なりひらは」の「はィ」、同古注
ねぬる夜のーつるィ、同古注　なりまさるかなーぬへきィ、同　ふんや。丶すひてはーのィ、同　「ことはゝ」の「丶ィ」、同　「よききぬを」の「をィ」、同古注　かすみの谷にーのィ、同　「宇治山の」の「山ィ」、同古注　身をうき草のーよィ（「身」の校異）、同古注　おいやしぬるとーらんィ、同　この外の人にーミィ（「に」の校異）、同　おほかれとーけれィ、同　よつのときー月ィ・トキィ、同　「おほんめくみの」の「のィ」、同　「山のふもとよりも」の「もィ」、同　「ふりにしことをも」の「もィ」、同　四月十八日。ーにィ、同　御書。のところのー所ィ（ママ）、同　「右衛門の府生」の「右ィ」、同
ふるきうたー哥ともふるきィ、同　たてまつらしめーせィ、同　「たまひてなん」の「なんィ」、同　人をもーともをィ、同　「あふさか山に」の「山ィ」、同　春夏秋冬にもーともィ、同　いらぬーはィ（「ら」の校異）、同　「まさこのかす」の「かすィ」、同　「今は」の「はィ」、同　まくらことは。ーにはィ、同　「哥のことと丶まれる」の「丶ィ」、同　「と丶まれらは」の「れィ」、同　「あふきて」の「てィ」、巻一内題　和歌ー倭哥ィ、巻一部立　内題下に「春哥上ィ」とあり、1　春。たちける日ーのィ、同　たちける日ーにィ・ヒィ、2　春。立ける日ーのィ、6　ふりかゝれるを。よめるー見てィ、同　花とやみらんーえんィ・ラィ、7　おりけれはーるィ、同　消あ

へぬ雪の－きえぬ雪のィ（ママ、傍線は「あへぬ」）、同　花とみゆらん－るかィ、8　きこえける時。－にィ、同　我なれと－はなィ、9　「きのィ」、12　「斑子也ィ」と傍書、同　谷風に－山ィ、13　紀。とものり－のィ、14大江千里－よみ人しらすィ、19　松の雪たに－まつィ（ママ、「松」の校異）、同　宮こはのへの－にィ、21　仁和のみかと。－のィ、22　おほせられし時。－にィ、23　「ぬきをうすみ」の「をィ」、同　みたるへらなれ－れるィ、24　「哥合によめる」の「によめるィ」、同　源。むねゆきの朝臣－のィ、同　今一しほの－ヲィ、25　たてまつれる－りけるィ、同　ふることに－トキィ、26　春しもそ－ときィ、同　みたれて花の－ハィ、27　西大寺の－西のをほてらのイィ、同　遍昭－へせうィ、同　春の柳か－あをやきィ、28　さへつる春は－なくなるィ、同　我そふり行－ぬるィ、34　松人のかに－とィ、36　笠にぬふてふ－といふィ、37　「法師ィ」、40　「梅花をゝりて」の「をィ」、同　それとも見えす－見ィ（「そ」の校異）、41　はるのよ。－のィ、42　ひさしく－ふィ、同　「かの家のあるしィ」、同　いひいたして侍－たりィ（「て侍」の校異）、同　よめる－ムタルィ、43　「花の」の「のィ」、45　うつろひぬらん－にけんィ、47　「法師ィ」、50　いたくなわひそ－ものなおもひそィ、同　「又は」の「はィ」、52　きさき－いィ、同　さゝせたまへるをみて－させるをみてィ、同　おほき－大イ、同　「おほいィ」、同　しかはあれと。－もィ、54　石はしる－いはィ、同　たおりてもこん－こんィ（ママ）、モテラムィ、55　「法師ィ」、57　年のおいぬる－くれィ、同　「きのィ」、同　おなし昔に－ナカラニィ、58　さくら。を。よめる－の花ィ・みてィ、59　「時に」の「にィ」、同　たてまつれる－りけるィ、同　さきにけらしも－なイ、61　よみける－めるィ、同　年たにも－ことしたにィ・トシタニモ（ママ）、62　ひさしく－うィ、同　よみける－よめるィ・ミケルィ、64　ちりぬれと－はィ、65　いさやとかりて－リモティ、67　「まうてィ」、68　哥合の時。－にィ、巻二部立　内題下に「春下ィ」とあり、72　この里に－とィ（「の」の校異）、73　かつちりにける－りイイイ、75　「の花のィ」、同　雪そふりつゝ－にィ（ママ、「そ」の校異）、78　あひしれり－りて侍イ、79　作者ナシ－清原のふかやふイイ（清輔本・新院御本作者ありの意）、80　わつらひ。ける－侍イ、同　「おろしこめてのみ」の「のみィ」、同　なれりけるを見て－りたるをみてィ、同　作者注ナシ－

典侍貞観寛平延喜イ（嘉禄本の注記）、81　雅院ー閑イ、同　延長元年哥也、進入□キイ本（詞書末書入、不詳）、82　花の。ーとくイ、同　ちりけるを。ーみてイ、同　「さかすやは」の「はイ」、同　みる我さへにー人イ・イ同（「イ同」とあるは嘉禄本は貞応本に同じの意か）、83　風も吹あへぬーすイ、85　春宮ー東イ、同　好風（貞応本の作者注記）ー良イ、86　「凡河内イ」、同　ふるたに。あるをーもイ、87　よめるーミケルイ、88　「大伴イ」、90　「平城天皇イ」（「しもにありイ」と注記）、同　色はかはらすーかはらねはイ、同　花は咲けりーそイ・るイ、92　「法しイ」、同　うつろふ色にーをイ、94　春の哥とてーはなイ、95　ましりなんーとひイ、99　あつらへつくるートイ、101　さく花はーサクラハナイ、107　「典侍イ」、109　をのかは風にーそきイ（ママ、「風」の校異）、112　わか身もともにー人もイ、115　あへりけるにー侍イ（「あへり」の校異）、117　夢のうちにもーそイ、同　花そ散けるーもイ、119　をうな。のーともイイ、120　ふちの花。ーのイ、同　さけりけるを人のーさけるを人のイ、121　こしまのさきのーくまイ、122　春。雨にーの（ママ）、124　ほとりにーつらにイ、128　春しなけれはー花イ、同　鴬もーのイ、129　水のまに〳〵ーみちイ、130　おしみてもーめともイイ、133　ぬれつゝもーそイイ、134　哥合にーの哥イ（清輔本「哥合の哥」の意）・のイ（嘉禄本「哥合の春のはての哥」の意）、巻三部立　校異ナシ、135　人まろか。也ー哥イ、136　みてよめるーよめりけるイ・ヨメル、138　伊勢ーそせいイ、同　またしきほとのーときのイ、同　声をきかはやーせよイ、140　五月きぬらんーつらんイ、同　いまそなくなりーるイイ、142　「こえける時に」の「にイ」、同　とものりー貫之イ、143　きゝて。ーよめるイ、144　いその神。ーのイ、146　ふる郷さへそーヒトイ、159　「題しらすイイ」、161　外になくねをーのイ（「に」の校異）、162　我。うちつけにーもイ、163　たゝみねータ、ミネイ（ママ）、同　むかしへやーいにイ・ムカイ、164　なきわたるらむーかなイ、166　雲のいつくにーこイイ、167　つかはしけるーやれりけるイ、168　かよひちはーにイ、巻四部立　内題下に「同上イ」とあり、170　秋。立日ーのイ、同　うちよする—フキイ、171　秋のはつかせーかせかなイ、172　いなは。そよきてーもイ・とイ（「いなはもそよとイ」の意）、175　もみちをはしにー船イ、177　寛平御時。ーにイ、178　おなし御時。ーのイ、181　「題しらすイ」、184　もりくる月のーおちイ、187　秋そかなしきーこそ・ヲカナシ

（ママ、清輔本「秋こそかなし」新院御本「秋ソカナシキ」の意を誤れるか）、188　露けかりけり—るィ、189　いつはとは—もィ（上の「は」の校異）、192　さよなかと—にィ、同夜はふけぬらし—なりィ、193　「これさたの」の「のィ」、197　是貞—これたかィ、201　道はまとひぬ—もィ、203　ちりてつもれる—シィ、（「て」の校異）、204　と思ふは山の—見しはィ、同　陰にそありける—さりけるィ、206　「在原ィ」、210　かりかねは—のィ・ハイ（ママ）、211　うつろひにけり—色つきにィ、213　「きゝてィ」、215　「題不知イィ」（ママ）・「□イニナシ」と注記、216　うらひれをれは—ふィ、218　よめる。—哥ィ、同　「藤原ィ」・フチハラノィ、220　独ある人の—ぬるィ、222　「ある人のいはくィ」、同　この哥は。—ある人ィ、同　哥也と。—なんまうすィ、223　枝もたわゝに—とをゝィ同（「とをゝ」の傍書は底本に本来存したと考えられ、「ィ同」は清輔本本文に「とをゝ」とあるを示す表記であろう）、224　つゆしもに—シケミィ、同　ぬれてをゆかん—ふィ・ヌィ、226　名にめてゝおれる許そ—かほをよみうちみはかりそィ、227　「僧正ィ」、232　なそ色にいてゝ—とィ、234　めに。見えねとも—もィ・はィ、同　「見えねとも」の「もィ」、237　「兼覧王ィ」・或本ニかねみの大君ィ、238　「まかりたりける時」の「たりィ」、同　「みなィ」、241　そせい。—法師ィ、同　か。こそにほへれ—にィ・イ同（おそらく嘉禄本は貞応本に同じの意であろう）、242　「平良文」の「平ィ」、243　寛平御時。—のィ、同　袖とみゆ覧—のィ、244　なくゆふかけの—くれィ、247　ぬれてのゝちは—色ィ、248　仁和のみかと。—のィ、同　「僧正ィ」、同　秋のゝらなる—にィ、巻五部立　内題下に「同上ィ」とあり、249　やすひて—朝康（トモヤス）ィ、250　浪の花にそ—こそィ、同　秋なかりける—けれイィ、251　紀。—のィ、255　梅の木。—のィ、同　ありけり—るィ、同　おなしえを—にィ、同　西こそ秋の—にそィ、256　いし山。—寺ィ、257　秋の木のはを—山へィ、260　もり山—るィ、261　「秋のうたとてよめるィ」、262　あたりをまかりける—にありけるィ、265　「霧の」の「のィ」、同　さほの山へに—をイイ（二行割の「イ」右へずれて書く）、267　はゝその色は—モミチィ、268　むすひ付て—いひィ、269　御とき。—にィ、同　たまうける—ひィ、同　殿上—うへィ、同　あけられて—アリケレハ（ママ、「イ」ナシ）、同　つかうまつれるとなん—りたりけるなりィ、271　花まちとをに—ほィ・オィ、272　おなし御とき。—にィ、同　。はまを—すイイイ、

同　うへたりけるを—にィ、273　いたれるかたを—りけるをイ、273　いつか千とせを—ハチヨヲィ、274　ひと。まてる—をイ、同　かたを。よめる—みてィ、275　おもひし花を—きくイイ、276　よみける—よめる（ママ）、277　「凡河内ィ」、279　色のまされる—はイイ（「る」の校異）、282　侍ける。に—時ィ、同　治部少輔五位ィ、283　「この哥は」の「はィ」、284　「又は」の「はィ」、291　よはからし—めィ、292　紅葉ちりける—けりイイイ、293　かけりけるを—かけるをィ、298　秋のこのは、—のィ、300　わたりける時。—にィ、同　なかれけるを。よめる—見てイ、302　「坂上ィ」、305　「もみちの」の「のィ」、同　見てをわたらむ—そィ、306　「是貞のみこの家の哥合のうたィ」（ママ）、307　「ほにもいてぬ」の「もィ」、309　まかれりけるに—日ィ、同　もていて南—ちいなむィ、310　寛平御時。—にィ、同　よめる—りけるイイ、313　たつねもゆかん—いなんィ、巻六部立　内題下に「同上ィ」とあり、315　冬そさひしさ—わイ、316　きよけれは—さむィ、317　吉野の山に—たかきィ、319　山の滝つせ—たつきもィ、325　とき。—にィ、328　「ふりてつもれる」の「てィ」、同　つもれる。—かィ、329　あとはかもなく—ナクティ、330　よみける—めるィ、331　「ふりかゝれりける」の「れィ」、同　よめる—みけるィ、同　思かけぬを—モカケヌィ、332　「坂上ィ」、334　この哥。—はィ、335　雪。ふれるを—のィ、同　「花の色は」の「はィ」、336　まかひせは—うつりィ、338　つこもりに—の日ィ、342　「時に」の「にィ」、同　「たてまつれる」の「れィ」、同　「紀ィ」、巻七部立　内題下に「同上ィ」とあり、343　千世にやちよに—ましませィ、344　君か千とせの—いのちィ、345　すむ千鳥—なくィ、347　仁和の御時。—にィ、同　君かやちよに—ソチィ、349　業平—ゆきひらィ、350　「きのこれをか」に「家本用之ィ」と注記、351　宮の—きみにィ、同　。五十の—御ィ、同　したに—もとにィ、356　かはりて—あつらへられてィ、同　よみ侍ける—よめるィ、356　「法しィ」、357　内侍のかみ。—のイイ、同　四季—四時ィ、・イ同ィ（おそらく「四時」は清輔本に対校された新院御本本文を示し、「イ同」は嘉禄本は貞応本に同じの意、さらに「四時」が漢字表記のため清輔本本行本文であるとの誤解を招かないため「イ同ィ」として本行は「四季」と念押ししたのであろう）、同　かき。—つけィ、同　詞書注記中の「延喜聖主」に「帝ィ」と校異、同　詞書末に清輔本にはありの意で「春ィ」、361　色まさりゆく—かはりィ、

362 秋くれと—なれィ、364 たまへり—ひィ、同 峯たかき—ちィ（「た」の校異）、巻八部立 内題下に「同上イ」とあり、367 をくらさんやは—さらめかはィ、368 おやのまもりに—とィ、371 たちなん後は—ときィ・ノチィ、372 とも。—のィ、同 「たちのィ」、同 まかりけるに—れはィ、374 わかれける時。—にイ、375 すみける人を。—はィ、376 きみとし—きんィ、376 「籠」に注して「この本になしこと本にあり無御本イ」（清輔本により書入）、同 みつき、みとし—へィ（「つ」の校異）、377 人の家にやとりてあか月いてたつとてまかり申しけれは女の—いてたつとてまかりまうし、けれは女のィ・カタカナヲナシィ（清輔本の片仮名傍書新院御本は定家本に同じの意）、同 「よみ人しらすィ」（ママ）、378 「人の」の「のィ」、380 人—ときィ、382 「あひしれりける」の「れィ」、383 雪みるへくも—ゆきィ、同 あらぬわか身は—にィ、384 をとは。山の—のィ、386 恋やわたらん—もえィ、388 わかれおしみけるに—れはィ、389 よみける—めるィ、390 あふさかを—のせきをィ、391 「ちふるか」の「かィ」、392 花山に—はなみにィ、同 「ゆふさりつかた」の「さりィ」・サリィ（清輔本本行は「さり」なく、新院御本は「さり」ありの意）、同 見えな、ん—ぬかなィ・ナ、ムィ、393 山—ひ〔ゑ〕ィ、同 まうてきて—ける日（ママ）、同 ついてに—□ィ（「に」の校異、「無」か）、同 「よめるィ」、394 さくら。の—の花イイ、396 しもはみゆらん—るィ、397 いたう—くィ、同 「まかりいてける」の「いてィ」、同 おりに。—きのつらゆきかィ、同 「つらゆきィ」、399 。ものかたりして—あひィ、同 「うれしくもあるかな」の「なイ」、403 いつれを道と—かィ（「を」の校異）、同 まかふまてちれ—とィ、405 。ともの—紀ィ、巻九部立 内題下に「同上」（ママ）、406 月。いとおもしろく—のイ、同 左注末に「贈—ィ」とあるも不詳、407 「にふねにのりていてたつとて京なるィ」、409 「この哥は」の「はィ」、410 かきつはたいとおもしろく—いィ（「き」の校異）、同 おり。て—ゐイ、同 よめる—みけるィ、411 恋しう—くィ、同 思やれは—なんみやれはィ（「思やれは」の校異）、同 「思わひて」の「わィ」、同 はや。—くィ、同 「みな人もの わひしくて」の「ものィ」、同 「とあしとあかきィ」（ママ）、同 見えぬとりなり。—けれはイイ、同 これは—かィ、同 。き、て—うちィ、412 つれてこし—むィ（「つ」の校異）、同 かへるへらなり—るィ、同 「この哥は」

の「はィ」、同　「なんいふ」の「なんィ」、417　「まかりける時に」の「にィ」、同　ついて。ーにィ、418　いひけらくーはくィ、同　「あまのかはらに」の「らィ」、同　「さか月はさせ」の「はィ」、419　宿かす人もーるィ、420　「おはしましたりける」の「たりィ」、421　きるへきにーをィ、巻十部立　校異ナシ、422　そほちつゝーけてはィ（ママ）、423　ゝ（と）きすきぬれやーはィ、424　みたれけるーたるィ、425　つゝまめやーぬィ、同　うつせみんかしーもィ、426　うめー女ィ（ママ、「ムメ」の誤か）、428　思へらなるーりィ、429　。ふかやふー清原のィ、431　。とものりー紀（ママ）、同　あはをかたまのーわィ、432　秋はきぬーたちてィ、同　霜のさむさにーかせイイ、433　あふ日かつらーかつらィ・あふひィ、435　なる花をーものィ、442　花ふみしたくーちらすィ、同　のはなけれはやーなるをィ・レハヤィ、445　「后の」の「のィ」、同　けつりはなさせりけるをーはへりけるィ・ケツリハナサケルヲィ（清輔本本行「めとにはへりけるはなさせりけるを」の意）、448　。からはきー題ィ、同　よみ人しらす。ー根本ィ、449　うはたまのーむィ・ウィ、456　「春の」の「のィ」、457　いかゝさきちるーくるィ・チィ、458　浪ちはあとも—やィ（「あ」の校異）、同　のこらさりけるーりイイ、463　秋くれとーはイイ、同　ちらすはかりをーそィ、464　花。ことにーかィ（ママ）、466　そこはしられんー南ィ、巻十一部立　内題下に「同上」（ママ）とあり、473　年をふる哉ー人をまつィ、476　むかひにた。ゝりけるーてイイ、477　「よみ人しらすィ」、同　しるしらぬーすィ、478　祭にーのつかひにィ、同　つかはせりけるーしィ、479　花つみー□ィ（「つ」の校異、「無」か）、481　なか空にのみーきィ（「の」の校異）、484　夕暮はーのィ、同　人をこふとてーこふる身はィ、485　人しつけすはーぬィ、487　賀茂の社のーかみィ、489　恋ぬ日はなしーそなきイイ、490　夕月夜ーつく日ィ、492　岩きりとをしーおイイ、同　をとにはたてしーもィ、493　ありてふをーといふをィ、496　おもへはくるゝーしィ、同　いろに出南ーぬへしィ、497　あふよしをなみーもイ、498　梅のはつえにーほイイ、500　下もえはせんーにせんィ・をィ、501　成にけらしもーなィ・モィ、502　あはれてふーといふィ・ティ、508　「物思ころそ」の「そィ」、510　あまのつりなはーたくィ・ツリィ、同　くるしとのみやーヲィ（ママ、「と」の校異）、516　かたもなしーしらすィ、524　成やするーありィ、525　ねんかたもなしーやなきイ（ママ、「イ」の位

置判然とせず）、526　夢に見えつゝ—みゆるはィ、529　あらぬわか身の—もののゆへィ、534　人しれぬ—すィ、539　こたへぬ山は—空ィ、544　ひとつ思に—人をィ、545　をきそはりつゝ—そへりィ、546　あやしかりける—けりイイ、547　ほにこそ人を—はィ・ヲィ、548「ほのうへをてらす」の「をィ」、549　我かはあやな—かやィ・カハィ、同　恋すしもあらん—をせさらんィ、551　奥山の—をくらィ、同　すかのねしのき—しィ・スィ、同　けぬとかいはん—かとィ、巻十二部立　内題下に「同上」とあり、556「人の」の「のィ」、同「真せい法し」の「法しィ」、同　法しの—かィ、同「こと葉」の「葉ィ」、同　もとに—ひィ・モトィ、同　つかはせりける—しイイ、558　うつゝ也南—ならイイ、559　住の江の—よしィ、567　我は也ける—ぬるイイ、568　心みに—むィ、569　夢といふ物そ—てふィ、572　むねのあたりは—わィ、575「法師ィ」、580　おもほえなくに—ゆるかなィ、584　いふ人のなき—モナシ（ママ）、587　つねよりことにまさるわか恋—もィ・もなをふかきィ（「もィ」と書入れたのち、更めて「もなをふかきィ」としたもの）、589「ゝ（の）たうひける」の「うィ」、同　たうひける—ヘイ（「ひ」の校異、位置不分明）、591　恋わたり釵—るらんイイ、593　ぬきてわかぬる—れィ・キィ、598　ふりいてつゝなく—て（「い」の校異、不詳）・出てィ・「つゝィ」（嘉禄本「ふり出てなく」の意）、同　涙には—川ィ、606　わかなけきをは—思ィ、同　我のみそしる—きくィ、同　巻十三部立　内題下に「同上」とあり、616　ついたちより—にィ、同　ものら—をィ、同　「のちに」の「にィ」、617　家に侍—なりィ、同　。としゆきの朝臣—藤原ィ、同　なかめにまさる—メマサルゝィ、618「返しによめるィ」、619　題しらす—タイシラス（ママ）、620　ゆきてはかへる—きぬるィ、621　けぬへき物を—キエヌヘキカナィ、同「ある人の」の「のィ」、628　みちのくに—おくにィ、632　まもらすれは—セケィ、同　かへりて—きてィ（「て」の校異）、635「をのゝィ」、同　秋のよも—はィ、636　おもひそあへぬ—もィ・はてぬイイ、643　をき釵かたも—おィ（「を」の校異）、644　人にあひて。—のィ、645「業平朝臣の」の「のィ」、同　伊勢のくにゝ—へイ、同　。まかりたりけるとき—かりのつかひに（ママ、「イ」あるべし）、同　ひそかに—みイイ、同　すへ。なくて—もィ、646　よ人さためよ—こよひィ、647　さたかなる—やィ・イ同（「イ同」は嘉禄本本文が貞応本に同じことを念押ししたもの）、

650　あらはれは－てィ、同　あひみ初ける－けんイイ、651　滝の音には－つィ（「の」の校異）、654　おもふとち－てィ、656　さもこそあらめ－サコソハ（ママ）、同　人めをよくと－もるとィ、同　みるかわひしき－すへなきィ・さイイ（ママ、不詳）、657　夢ちをさへに－はィ・ニィ同（「ニィ」は新院御本、「同」は嘉禄本がそれに同じの意であろう）、662　そこに通ふと－ひてィ、664　をとにたに－のみイイ、同　人のしるへも－くィ、665　みるめのうらに－そこィ・ウラニィ、668　色にいてぬへし－くィ、670　「平ィ」、670　なき恋を－ものイイ、671　人麿か。也－哥ィ、672　かくるとすれと－すィ・ルィ、676　ちりならぬ名の－きィ、同　空にたつらむ－かなィ、巻十四部立　内題下に「同上ィ」とあり、680　もゆるわかこひ－身をィ、685　「ふかやふィ」、686　「凡河内ィ」、689　たまひめ－はィ（「た」の校異、ママ）・無御本ィ、690　いさよゐに－ひイイ、691　「待いてつる哉」の「いィ」、692　またすしもあらす－しィ、693　わかもとゆひに－のイ（「イ」の位置不分明）、同　霜はをくとも－やをく覧ィ、694　「露を、もみ」の「をィ」、697　敷嶋の－やィ、700　物とそ我も－はイイイ（「そ」の校異）、702　「あふみのィ」、705　「あひしりて」の「あひィ」、同　雨のふりけるをなん－なるをうなィ（ママ、「る」以下の校異）、同　よめりける－めるィ、706　「あるィ」、同　「さためす」に校異あるも虫損読めず、同　つかはしける－せりけるィ・セリィ（ママ）、同　成ぬれは－とまらねはィ、707　ありてふものを－といふィ・ティ、708　すまのあまの－うらにィ、709　成ぬれは－見えィ、714　「法師ィ」、715　きけはかなしき－なイイイ、717　はなれなめ－わかれィ・スィ（「か」の校異）、718　心。つくからに－のイイイ、同　かなしき－こひィ、720　「あつま人」の「人ィ」、722　あた浪はたて－うはィ、724　みちの。くの－おィ、同　みたれんと思－そめにしィ、725　思ふより－ひ（ママ）、726　心し秋の－も（ママ、「の」の校異）、731　ふる日となれは－みィ、同　袖そぬれける－ひちぬるィ・ぬるイイ（ママ）、733　あはとうきなん－にィ、734　いにしへに－むかしィ、735　あひかたくあり－かりィ・クアリィ、同　人はしらすや－しるらめやイイ、737　「右のィ」、738　「題しらすィ」、740　昇　延喜八年中納言　民部卿九年　十四年大納言ィ、742　ことつてもなし－のなきィ、745　しのひに－てイイ、同　ものら－をィ、同　いそき。－てイイイ、巻十五部立　内題下に「同上ィ」とあり、747　にしのたひに－いイイ、同　とをかあまり。－は

かりィ、同　こひてーオモヒテ、ィ、同　にしのたひにーい（ママ、「ひ」の校異）、同　「いきて」の「いィ」、同　かたふくまて。ーにィ、同　よめるーヨメリケルィ、同　もとの身にしてーヲナシ（ママ、「もとの」の校異だが記入箇所大きく誤り、748詞書「題しらす」の右傍にあり）、748　枇杷左大臣ィ（作者注記）、同　「ほにいて、」の「いィ」、749　「朝臣ィ」、同　よそにのみーをとにィ、754　花かたみーつィ、同　めならふ人のー色ィ御本如此（「人」の校異）、同　忘られぬらんーにけん（ママ）、755　おひてなかるゝーおもひみたるゝィ（「イ」の位置やや不分明）、同　うらなれはーやィ、同　あまはくるらめーよイイイ（「く」の校異）、756　わか袖にーはィ、761　君かこぬ夜はー五ィ、同　我そかすかくー四ィ（以上二項四五句逆の意）、762　きこえさるらんーこさらんィ、763　ふりぬるはーれィ、769　貞朝臣登　備中守　仁和御子ィ（作者注記）、同　なかめふるやのーむるやとのィ、772　こめやとはーぬィ、773　わひにし物をーシティ（ママ、「シキ」の誤）、同　衣にかゝりーかはりィ・カ、リィ、776　音にそ鳴けるーぬるイイイ、779　なかぬ日そなきーはなしイイイ、782　うつろひにけりーおとろへにィ、784　きのありつねかーの（ママ）、787　身をわけてのみーしもイイ、788　つれもなくーなくもィ・モナクィ、789　とふらへりーひ侍ィ・ヘリィ、同　ふもとをみてそーよりのみィ、同　かへりにしーきぬィ、790　「あひしれりける」の「れィ」、同　ふちをーみイイ、同　つかはけりける（ママ）ーしィ（「けり」の校異か）・せりイイイ（ママ）、同　あさちにはーはにィ、791　「物おもひけるころ……よめるィ」、792　とものりー読人不知ィ、同　いひなからーしりィ、795　色にもありけりーいろにさりけるィ・そイイ（ママ）・るイイ、799　あかす散ぬるーてィ、803　「法しィ」、807　直子ーナホイコィ、同　世をはうらみしー人ィ、808　思しらすはーもイイイ、812　もはらたえたるーいともィ・ぬるイイ、818　数にそありける一数にさりけりィ（ママ）・ソアィ、巻十六部立　内題下に「同上ィ」とあり、830　忠仁公ィ（「さきのおほきおほいまうちきみ」の注）、同　延喜之比太政大臣只二人仍雖不辞官前ト云　前後之由也ィ、同　「法しィ」、同　しらかはゝーのィ、831　僧都勝延ーイ同（嘉禄本本文は貞応本に同じの意か）・僧正へんせうィ、835　「みふのィ」、839　時しもあれーまれィ・モアィ、同　秋やは人にー君か（ママ、「人に」の校異）、842　をくての山田ーおイイ、同　思けるかなーぬるイイ、844　おもひしてー

にイイイ（「し」の校異）、同　衣の袖はーのィ、846　御国忌ーおほんィ、同　「けふにやはあらぬ」の「はィ」、847　仁明ィ（「深草のみかと」の注）、同　みかと。ーのイイイ、同　「御時に」の「御ィ」・「にィ」、同　ひゑーえイイ、同　「又のィ」、同　苔の袂よーやィ、848　「身まかりての秋」の「のィ」、同　まかりけるをーにイイイ、同　「かのィ」、同　いれたりけりーるイイ、同　「右のィ」、849　君に別しーをイイ、850　うへ。けるーたりイ、同　人。ーのィ、851　むかしのこさにーにこさすィ、853　一むらすゝきーもとィ、854　「うたともと」の下の「とィ」、857　いくはくもあらてーなくィ、同　「女みこ」の「みこィ」、同　かたひらのーにィ、同　「ひもにィ」、858　「まかれりける」の「れィ」、860　をかぬ許をーそィ、862　つけりけるうたーつける哥ィ・侍ィ（嘉禄本「つけ侍けるうた」の意）、巻十七部立　内題下に「同上」とあり、863　露そをくなるーヤィ・イ同（嘉禄本貞応本に同じの意ならん）、同　かひのしつくかーい（ママ）、864　まとゐせる夜はーノィ、同　物にそありけるーさりけるィ・ニソィ、865　うれしさをーきィ、同　袂ゆたかにーけくィ、866　物にそ有けるーさりけるィ・ソアィ、868　やりけるー侍ィ（「やり」の校異）、869　寛平六年五月五日中納言即従三位ィ（「藤原のくにつねの朝臣」の注）、同　于時大納言左大将ィ（「近院の右のおほいまうち君」の注）、870　いその神。ーのイイイ、同　並松ーなむまつイイ、同　よろこひ。ーてィ、同　「いひィ」、871　高子　貞観八年二月女御　十年十二月生第一皇子十一年三月為皇太子ィ、同　元慶元年正月即位日為中宮六年正月為皇太后宮　春宮母儀女御也ィ、同　たまひけるーしィ（「ける」の校異）、同　けふこそはーよりィ、同　神代のことをーもイイ、同　思ひいつらめーしるィ、873　「左のィ」、874　「きこえけるに」の「けるィ」、同　ありつるーけるィ、875　なさはなり南ーライ（「さ」の校異）、876　「まかれりける」の「れィ」、同　あした。ーにイイイ、同　匂ひける哉ーぬるイイ、879　月をもめてしーにィ・ヲィ、880　きたりけるにーれはィ、同　いたらぬ里もーこともィ・サトハイ本、881　見えけるをーハヘリィ、同　出る月影ーかなィ、884　「物かたりを」の「をィ」、同　十一日ーとを日あまりひとひィ、同　よみ侍けるーめるィ・ヨミケルィ、885　慧子　母藤列子従五位上是雄ィ、慧子　代始斎院天安元年二月廃之（中略）母同惟喬二年而退ィ、同　あきらけいこーきィ、889　「ありこし物を」の「こィ」・コィ（「を」に校異あるべきもナシ）、

890　ふりぬる物は－ゆくィ・ヌルィ、891　うれを〻もみ－すゑィ・うれィ（ママ）、892　おらのしたくさ－ふィ、893　とまらぬ物を－たィ、895　「このみつの哥」の「みつのィ」・ミツノィ、同　「となんィ」、900　「ふみをもて」の「をィ」、同　「きたりけるを」の「けるをィ」、同　ことは〻－事ィ（「は」の校異）、同　さらぬ別も－のィ、同　ありといへは－ティ（「とい」の校異）902　「ありはらのィ」、同　やへふりしける－にかさなるィ、903　おほみき。－なとィ、同　おほみあそひ。－なとィ、同　つかうまつれる－りけるィ、同　あはましものを－かィ、904　宇治の橋もり－姫ィ・モリィ、同　あはれとそ思ふ－かなしとィ、同　「あはれとそ思ふ」の「そィ」・はィ（「そ」の校異）、910　よるかたもなし－くィ、912　玉津しまかも－かなィ、914　ありとたにきく－ナィ、915　たかしの浜の－うらィ、同　まちわたりけれ－つィ、916　「まかれり」の「れ」に傍線（ママ）、同　まかれり－たり（ママ、「り」の校異、前項と併せて「まかりたり」の意か）、同　おふる玉もを－のィ、918　けふゆけは－とィ、920　あそひける日－をィ、同　おはしましたりける－てィ（「たりける」の校異）、同　ゆふ。つかた－さりィ、同　おはしまさん－なんィ（「まさん」の校異）、923　。布引の－おなしィ、927　「人々に」の「にィ」、同　よませたまう－ひィ、同　けるに－れはィ、同

主なくて－ライ、930　所。おもしろし－をィ、巻十八部立内題下に「同上ィ」とあり、936　しか。りとて－あィ、同　まつなけかれぬ－る〻ィ、937　侍ける時。－にィ、同　いか〻と、は〻－にィ、938　えいてた〻しや－むィ、939　あはれてふ－といふィ、940　あはれてふ－といふィ、943　いつらわか身の－はィ、950　宿もかな－いへィ、951　うきこそまされ－さィ、952　すまはかは－モィ、同　世のうきことの－時ィ、956　猶うき時は－ニィ、957　ものおもひ。ける時－侍ィ、同　竹の子の－ねィ、959　竹のよの－くれ竹のィ、同　高津内親王ィ、962　こもり侍ける。に－時ィ、963　返し－かへり事ィ、965　ほとはかり－たにもィ、966　たちはきに。侍ける－てィ、969　いひをくりける－れりィ（「り」の校異）、同　「こ〻かしこに」の「にィ」、同　よふくるまて。－にィ、同　。つかはしける－よみてィ、同　。なりひらの朝臣－在原の（ママ、「ィ」なきも清輔本の校異と思われる）、970　まかり。けるに－て侍ィ、同　雪。－のィ、同　ふか〻りけり－れはィ、同　「いたりて」の「たィ」、同　忘れては－つ〻ィ、973　「この哥は」の「は

ィ」、同　おとこに—人にィ、977　ありける。に—おりィ、978
よめる—みけるィ、同　雪とつもらは—ルトィ、979「宗岳
大頼ィ」、同　きゆる時ある—たィ・キィ、983　我いほは—ヲ
ィ（「ほ」の校異）、985「いれたりける」の「たりィ」、同
すむへき宿と—さとィ、986　まうつる—てけるィ、同　源。い
たるの朝臣女—のィ、988　嵐のかせは—のィ、同　わひつゝ
そぬる—ふるィ、990　ふちにもあらぬ—すィ、同　わか宿も—
はィ、991　かよひつゝ—てィ、同　こうち。ける—侍ィ、992
いりに釵—とめてィ、993「ついてにィ」（ママ、おそらく
「ついてィ」の誤）、同　よ。なかきうへに—のィ、994　ひとり
こゆらん—ゆくィ、同　すみわたりける—りイ、同　この女
。—のィ、同　なく。て—なりイ、同　あひたに—ほとにィ、
同「もしィ」、同　まねにて—さまイ・マネィ、同　なかに。—
てィ、同　かくれみ。れは—侍けれィ（ママ、「れ」は衍）、同
夜ふくるまて—まゝにィ、同「うちなけきてィ」、同　きゝ
て。—いとあはれとおもひてィ、同　いひつたへたり—るイ、
996　わすられん—れなんィ、997　いつはかり。—にィ、同　文
屋。—のィ、同　なにおふ宮の—のみかとのィ（ママ、「おふ」
以下の校異）・ナニヲフミヤノィ、998　寛平。—のィ、1000「よ
みてィ」、同　山川の—みつィ、巻十九部立　内題下に「同上
ィ」とあり・「雑躰ィ」（清輔本内題下に「短哥」とあり、「雑
躰」の文字ナシの意）、1001　もえつゝとはに—はにもィ・ト
ハニィ、同　かくなはの—にイ、同　えふの身なれは—ティ
（「え」の校異）、同　おもひはふかし—くィ、同　たきつ心
を—はィ、同　をく露の—しもィ、1002　たてまつりし—けるィ、同　をくる心も—れィ（「く」の校異）・ころもゝィ・コ、
ロモィ、同　おほせかしこき—みィ、同　とれりとすれと—
しふとィ（「れりと」の校異）、同　かへりみもせぬ—すィ、
1003　人まつこそは—ろィ（「つ」の校異）、同　忠峯集哥　こ
れを思へは　いにしへに　くすりけかせる　けたものゝィ、
同　そてをかし—なすィ、同　これにそはれる—せィ、同
くすりかも—もかィ、1004　うたィ（清輔本詞書「うた」とあ
りの意）、同　いはし水—つゝしィ、1005　うちしくれ—はつイ、
同　こきちらし—とィ（「こ」の校異）、同　年をあまたに—
もイ、1006　七条のきさき—いのィ、同　たまひ。けるのち—に
ィ・うてのちィ（清輔本「たまうてのち」の意）、同　よみけ
る—めるィ、同　延喜七年六月八日崩三十六ィ、1007ノ前　「旋
頭哥ィ」、1007　うちわたす—るィ、1008　たゝなのるへき—すみ

るィ（「なのる」の校異）、1010　そめるなりけり－ぬィ（ママ、「る」の校異）、1014　またく心を－きィ（「く」の校異）、1015「題しらすィ」、同　「凡河内躬恒ィ」、同　なかしてふよは－といふィ、1017　のへにたはるゝ－ミタィ、1018　花のすかたそ－のィ、1021　「清原ィ」、1022　たゝるに我は－たくひにしあれはィ（ママ）、1027　我おほしといふ－をィ（「お」の校異）、1028むなしけふりを－は狄ィ、1030　心やけをる－りィ、1031　哥合のうた－によめるィ（「のうた」の校異）、1032　かゝらぬ山の－タゝィ・イ同（嘉禄本本文貞応本に同じの意ならん）、1033つまこひは－にイィ、1034　なそわか恋の－とィ・ソィ、1036　「壬生ィ」、1037　いひはてぬ－めィ・イ同（嘉禄本本文貞応本に同じの意ならん）、1038　思ふてふ－といふィ、1040　いてや心は－なィ（「て」の校異）、1041　人をおもはぬ－えィ（「は」の校異）、同　むくひにや－つみとてやィ、1042　ナシ－一〵本ふかやふィ、同　なかりけるやは－りィ（「る」の校異）、1043　ナシ－一〵本よみ人しらすィ、1044　うつるてふなり－といふィ、1045　はなちすてつる－たるィ、1046　声のやとりの－こそイィ、1047　夏は人まね－かつィ・ナツィ、1048　平中興－たひらのなかきィ、1052　まめなれは－とイィ、1053　名のたつことの－にィ（「名の」の「の」の校異）、1054　わか身にいとのよるといへは－とくるとィ（清輔本「わか身にいととくるといへは」の意）、1056　題不知ィ（清輔本にありの意）、1058　になひもて－おもひィ、同　あふこなきこそ－身そィ、同　恋しかりけれ－わひしイィ、1063　ことそやさしき－もィ（「そ」の校異）・くィ、1067　事－心ィ、1068　立よりて－れはィ、巻二十部立　内題下に「同上」とあり、1070　しもとゆふ－いふィ、1071　あさたちくれは－とイィ、1073　しはつ山－つは山イィ、1074　神のみまへに－むろにィ、1076　ひともみるかに－ねィ、1078　道のくの－おくのィ、1079わか門の－やとのィ、1082　御へ－おほんへィ・御へウィ、1083　御へ－おほんへィ・御へウィ、1084　御へ－おほんへィ・御へウィ、同　みのゝ哥－くにのィ、1086　あふみのや－ちのィ、同　君か千とせは－をィ、同　「あふみィ」、1087　明ぬとも－れとィ、1088　いつくはあれと－らィ、1095　ますかけもなし－はイィ、1096　しるもしらぬも－すィ、1097　けゝれなく－らィ、1098　人にもかもや－にもィ（「もや」の校異）、1100　かものやしろの－まつりィ、墨滅歌標題　墨滅歌－滅イ、1103　友則。－下イ、同　こひつゝをれと－はィ、1104　おきのゐて－をィ、1105ノ次　「巻第十一　桂宮下」とあるを「桂宮下」を「巻第

十二」の前行に移動「ィ」とする、1106　おとらさりけり－を（ママ）、真名序　古質之。－躰ィ、同　皆。落－以ィ、同　其華孤。栄－独ィ（「孤」の校異）・以ィ、同　以此為花－之ィ（「此」の校異）、同　二三人。－而已ィ、同　其詞華－其歌甚花ィ、同　喜撰－撰喜本ニ、同　其－詞ィ、同　詞－甚ィ、同　古。衣通姫－之ィ、同　「有逸興而躰」の「而躰ィ」、同「不用詠和歌」の「詠ィ」、同　相将－将相ィ、同　後世－輩ィ（「世」の校異）、同　義慣－通ィ（「慣」の校異）、同　神明。也－者ィ、同　野宰相－野相公ィ、同　皆以他才－依ィ（「以」の校異）、同　。陛下－伏惟ィ、同　「于今九載」の「于今ィ」、同　況哉－乎ィ、同　人麿－丸（ママ）

以上、本書の校異のうち、合点、声点に関わるものを除くほとんど全てを掲げたことになる。紙幅を多く費やし煩雑にすぎる感があるが、本書の校異にはそれなりの注目すべき点があると認め、あえて列挙したものである。

それは、本書が貞応本、嘉禄本、清輔本という代表的な三本対校の形をとっていること、また、本書の校異は文明年間における校異作業をそのまま伝えていて、当時としては画期的といってもよいことである。この作業を行った行阿の伝記が全く不明のため、背景が明らかにならない点は残念であるが、室町中期においてこのような校合作業が、必ずしも著名とは言えない人物の手によってなされたことは留意されなければならないであろう。校合作業はきめ細かく、質も高いものと認められ、一部に意味不明の箇所はあるものの、大部分は校合本本文を復元することが可能である。

和歌の出入りや、排列の異同が注記されていないのは、残念であるが、字句の異同から、対校本が奥書通り、まさしく清輔本、嘉禄本であることは十分に認められる。試みに巻一巻頭部分を見ることとする。

部立の「春哥上」が改行せず内題下にあるのは、清輔本のみではないが、清輔本の特徴である。

1詞書に「春のたちけるに」とあるのは正しく清輔本で新院御本との校合にまで言及されている。

6詞書に「ふりかゝれるを見て」と「見て」を存するのは、必ずしも全ての清輔本にあるわけではないが、曼殊院本、穂久邇文庫本、家蔵本のように一部の清輔本に見えるものである。

6「花とやみえん」は清輔本である。

7「花とみゆるか」も清輔本である。

14作者「よみ人しらす」は清輔本である。

このように対照していくと清輔本と定家本が対立する箇所で次々と清輔本に一致することが判明する。

しかし、その一方、清輔本としては不審な本文も少なからずある。

巻一巻頭から少し見ていくだけでも、7「おりけるは」(「る」不審)、8詞書「きこえける時に」(「に」が定家本と異なり存するのはよいが、清輔本なら「まうしける時に」とあるべき)、23「ぬきうすみ」「みたれるへらなれ」等いずれもおかしい。もともと、清輔本は定家本に比べ本文のゆれが大きい上、古写本でも誤写や不審な本文が目立つのが通例であるが、それを考慮に入れても、行阿の用いた清輔本は必ずしも善本とは言い難いようである。

作者名の表示について二、三著しい不審を挙げてみる。

138作者「そせい」

142作者「きの貫之」

377作者ナシ

477作者ナシ

792作者「読人不知」

1015作者ナシ

このうち、377 477 1015は作者名の書落しと考えられるが、それ以外は不審である。

一方、嘉禄本との校異であるが、当然ながら清輔本よりはるかに少ない。また、嘉禄本の原本ではなく転写本であるから本文の転訛が考えられる。

ここで片桐洋一氏が掲げられた貞応本と嘉禄本の異同箇所三十一箇所[10]について、本書の嘉禄本との校合状況を見てみると次のようになる。

一致するもの－59 94 134 143 272 275 300 357 374 442 556 745 849の十三箇所

本書底本が既に嘉禄本に一致しており、結果的に一致するもの－656 663 892 937 1067の五箇所

一致しないもの－36 108 120 382 387 396 417 783 852 930 1027の十一箇所

貞応本と嘉禄本の異同と見なし難く比較の対象としなかったもの－204 584の二箇所

割合から見れば、必ずしも一致率が高いとは言いえないが、行阿が校合に用いた嘉禄本が転写本であり、いかなる素性のものかが明らかでない(行阿がJ奥書でこれを「右近中将為相御本」と呼称しているのは、I奥書末尾に「此本付二属大夫為相」

在判」とあるのによっているのであろうから、原本でないこと勿論である）ことを考えれば、まず嘉禄本の性格を有していると言ってよいであろう。

また、底本である貞応本についてもその本文を検討しなければならないが、あまり善本とは言えないように思われ（冷泉家本と約二百箇所の異同がある）、時折、貞応本どころか古今集本文としてもいかがかと思われる本文を有する場合がある。しかしながら、以前にも述べたように[11]、中世に流布した古今集本文（多くが貞応本の末流本文と考えられる）がいかなる本文を有していたかについて明かにされていない現状では、本書の底本である本文が、当時の貞応本としていかなる位置にあるのか（つまり、この程度原本から転訛しているのが通例なのか、それとも特異なのか）が判然としないので、善本でないと言い切ることは出来ない。

ともあれ、本書は、清輔本本文研究の一資料としてのみならず、室町期の本文校勘作業の一様相を知る上からも重要な存在であるといえる。

三、茂山乙本古今和歌集

国文学研究資料館に一冊の複製本がある。葡萄色表紙の和綴本で、表紙中央の題簽に「茂山本古今和歌集」とある（函架番号シ二－五八）。この複製本の存在と、この本に清輔本に関連する点があることは三、四年以前浅田徹氏の御教示を得ていたのであるが、一見したところ、清輔本に関わる本文を有する伝本ではあるが、純粋の清輔本とは言い難いこともあって、そのままにしてしまったものである。ただ、本複製本そのものも稀覯で、本伝本もその存在がほとんど知られていないようなので、ここに紹介することとした。

従来本伝本に言及されたのは、管見の範囲では野口元大氏のみで、「古今和歌集定家本始終」（「上智大学国文学科紀要」17 平12・3）において

ついでをもって付言すれば、『毘沙門堂本』のように、巻十の後に墨滅歌を一括して収めている本が存する。茂山書道文庫所蔵の『古今和歌集』（乙本）がそれである。巻十までの零本であるが、巻頭に真名序、ついで仮名序を置く。本文は清輔本であるが、307番歌を欠き（稿者注、307は存在する）、墨滅歌の1103・1104・1105を本文中に持つかなり特異な本である。（14頁）

とされている。

野口氏には夙く「茂山本古今集解題」（「和歌史研究会会報」47昭47・10）という御論考があるが、そこで紹介された本は別本で、それを甲本とするゆえに本伝本を乙本と称するわけである。

実は本伝本は本文の混淆や改竄著しい本で、本文的価値は高いとはいえない。従って以下概略を述べるに止めることを許されたい。

本複製本は既述のように和装（袋綴）一冊本、表紙、扉に続いて江守賢治氏の識語が一頁ある。本文はアート紙に写真を印刷し、一頁上下二段、各見開きを収める。従って一頁に写本の四面分が収まる。表紙、遊紙は撮影されていない。墨付一面（半葉）ごとに漢数字で番号を付し、一より百六十七に及ぶ。奥に「昭和四十八年六月二十日／百部限定版　第拾四号」とあって（「拾四」は墨筆書入れ）私家版として頒布されたものと思われる。

茂山書道文庫蔵本（古今和歌集乙本）

存真名序、仮名序、巻一―十、墨滅歌

写　一帖

綴葉装。墨付、八七丁。毎半葉、真名序八行、仮名序、本文九行。和歌一行書。平仮名交り。内題、「古今和謌集序　紀淑望」（真名序）、仮名序にはなく、本文は順に「古今和謌集巻第一　黄門僻（ママ）／春哥上　六十八首」「古今和歌集巻第二／春哥下　六十六首」「古今和謌集巻第三／夏哥　卅四首」「古今和謌集巻第四／秋哥上　八十首」「古今和哥集巻第五　秋哥下　六十五首」「古今和歌集巻第六　冬哥　廿九首」「古今和哥集巻第七　賀哥　廿二首」「古今和哥集巻第八　別離哥　四十一首」「古今和哥集巻第九　羈旅哥　十六首」「古今和哥集巻第十　物名哥　四十七首」とする。

巻十末に墨滅歌があり、奥書はない。

全巻に墨声点を付す。

全巻に清輔本の勘物と覚しきものが書入れられているが、頭脚の所定の箇所ではなく、傍注等余白に書かれている。

新院御本との校異を示す朱傍注はない。

全巻に『新撰和歌集』入集歌であることを示す歌頭の合点がある。

本伝本について、江守賢治氏の識語には次のようにある。

茂山清太郎氏が所蔵されてゐる古今和歌集には、甲本と乙本とがあつて、これはその乙本である。乙本は上巻のみで下巻を欠いてゐる。

筆者についての確證はないが、堀江知彦先生は「伝・藤原為氏筆」と認められる。まさしく鎌倉時代前半の筆写であるが、巻五までと巻六以下とはその筆致を異にしてゐるので、二人または三人の手になるとの説と、一人の筆であるとの説がある。（後略）

本伝本の筆蹟であるが、複写で見るかぎり、古筆で二条為氏筆と極められる類いのものとはあまり似ていないように思われる。書写年代も古写本であることは認められるが、複写では判断出来ない。

次に一筆か否かであるが、おそらくは二筆、左のように分かれると思われる。

A筆―真名序、仮名序、巻一―四、墨滅歌

B筆―巻五―十

江守氏が筆蹟のわかれ目を巻五までとされたのは誤記であろう。

さて、両筆のわかれ具合が必ずしも自然でないので、A筆B筆いずれかが本来のもので、残欠となったものを補写したとも考えられるが、両筆が類似の筆蹟であり、書写年代が大きく隔たるようにも思われないこと、また、両筆の変り目で綴葉装の折（括り）を異にしているとは思えないことから、両筆の関係は補写ではなく寄合書なのではあるまいか。

さらに、この両筆は単なる寄合書ではなく、A筆部分は定家本、B筆部分は清輔本と本文の性格を異にしていることが判明する。全巻にわたって清輔本の勘物の書入れがあり、『新撰和歌集』入集歌であることを示す歌頭の合点を有するなど、一見清輔本であるかのごとき印象を与えながら、実際はこのような性格を持つに至った経緯は不明である。なお、書入れられた清輔本勘物の筆蹟であるが、確言出来ないが、A筆部分とB筆部分では異なるようにも思われる。

また、そうした観点からすれば、前記内題において、巻一―四は、部立を改行して書いているのに対し、巻五―十は、部立を改行せず内題下に書いていて、書式を異にしている理由も明らかになる。

さて、この辺りで本文を検討することとする。

異本歌並びに排列は以下の通りである。

A筆部分（巻一－四）

異本歌なく、排列も定家本と全同である。貞応本とその他の諸本が排列を異にする18「かすがのの」19「み山には」の二首は貞応本とは異なり、その他の諸本の排列と一致する（新編国歌大観と同一）。

巻一－四において、清輔本は、80ノ次に異本歌1「ゆくみづに」、82ノ次に異本歌2「ゆきとみて」の二首を有する他、排列においても、83 86 84 85 87、154 153と二箇所に異同があるが、本伝本はそれと異っている。

B筆部分（巻五－十）

254 253の排列となる。

307 306の排列となる。

446ノ次、異本歌3あり。

くれのをし（モ）　つらゆき

こし時とこひつゝをればゆふぐれのをもかげにのみみえわたるかな

456ノ次、異本歌4あり。

をきの井　みやこべしま　小町

こまち

をきのゐて身をやくよりもわびしきはみやこしま（ママ）べのわかれなりけり

463ノ次、異本歌5あり。

そめどの　あはた　あやもち

うきよをばよそめとのみぞのがれ行雲のあはたつ山のふもとに

以上、異本歌並びに排列は清輔本と全同である。ただし、異本歌5の位置については若干問題がある。通常、清輔本は異本歌5を462ノ次に置くからである。しかしながら、顕昭本は異本歌5の位置について、462ノ次、463ノ次の二案を示しており、この相違をもって本伝本の該当部分が清輔本であることを否定するものではない[12]。

次に字句にわたって検討を加えることとする。

まず、巻頭に書写されている真名序であるが、先に真名序は定家本であると述べたが、A筆部分のうち真名序のみが明確に定家本であると断定出来ない。

元来、真名序に関しては、清輔本と定家本の区別はさほど明確ではない。定家本について言うと、真名序を有するのは、ほ

とんど貞応本のみであるから、それに昭和切を参考に加える程度となる。

清輔本は零本が多い上、永治二年本である宮本家本の真名序は本来のものとは思われず、真名序が初めて加えられた仁平四年本は伝本が存在せず、保元二年本として尊経閣文庫本の真名序が存するにすぎない。

さらに、顕昭本は真名序に関しては清輔本を踏襲せず、多分に定家本寄りの本文を採用している（勿論その当時定家本は成立していない）。

従って、清輔本の真名序本文は確定し難い面が多い。

以上のような不確定な状況のもとで、本伝本の真名序本文を検討した結果は、全体としては定家本系の本文ではないかと思われるものの、定家本であると断定しうる程のものではないという結果になる。

まず、定家本と一致する例としては次のようなものがある。括弧内は清輔本である。

古今和謌集序　紀淑望（ナシ）

今反謌之作也（今返歌之作也）

長謌短謌旋頭混本之類（長歌短歌換頭混本之類）

古質之語（古質之躰）

其実皆落（其実皆以落）

纔二三人（纔二三人而已）

其躰近俗（其體近俗也）

此外氏姓（此外姓氏）

不用詠和哥（不用倭歌）

悲哉〻〻（悲哉）

後世知者（定家本「後世被知者」、清輔本「後輩被智者」）

義慣神明也（義通神明也）

其後和謌棄不被採用（定家本「其後和哥棄不被採」、清輔本「其間和歌棄不被採」）

軽情（雅情）

皆以他才（皆依他才）

不以斯道（不由斯道）

秋津州之外（秋津嶋之外）

名曰古今和謌集（名曰古今集）

四月十五日（四月十八日）

しかし、逆に清輔本と一致する例も存する。以下は逆の例で、括弧内は定家本である。

逸者其詞楽（逸者其声楽）
但見上古之哥（但見上古哥）
古之天子（古天子）
火友黒主哥（大友黒主之歌）
大友欠(朱)
雖貴兼将相（雖貴兼相将）
野相公（野宰相）
況乎（況哉）

このように本伝本の真名序本文は定家本、清輔本そのいずれにも一致する本文を持つが、全体とすれば、定家本により近い本文を有すると言ってよいのではなかろうか。例えば「古今和謌集序　紀淑望」と真名序が内題を有する点、「名曰古今和歌集」「四月十五日」など特徴ある箇所の一致は重視してよいかと思われる。

次に仮名序である。これもA筆部分である。

書写の形式に特徴があり、古注を本行と同じ大きさで二字下げに書き、朱合点（と思われる）を付している。この形式は一見顕昭本かと思わせるものがあり、古注を二行割とする定家本とは明かに異っている。

しかしながら本文が定家本であることには疑いの余地はなく、真名序のような清輔本寄りの本文は全くない。

次に巻一―四について排列が定家本に一致していることは既に述べたが、字句についても定家本であることに疑いの余地はない。

なお、巻一―四の部分が定家本のうち、いかなる本と一致するかは比較の結果明らかでない。

結局、巻十末に書写された墨滅歌を含め、A筆部分は全て定家本と認めうる。

そこで、次にB筆部分を検討する。

B筆部分が異本歌並びに排列において清輔本と一致することは前述の通りであるが、字句に及ぶと必ずしも単純ではない。清輔本に一致し、定家本と異なる本文も多いが、逆の場合も多い。しかも、少なからずという程度ではなく、かなり多いのである。

ところが、清輔本と異なり定家本と一致する箇所の中に、よく見ると元の本文を擦消し、その上から定家本本文を書いたと思われる例がかなりの数見かけられるのである。勿論、画面が大きいとは言えぬ複写を見てのことであるから確かなことは言えない上、擦消された下の文字は全く読みえないから、それが

清輔本系の本文であった証拠もないが、本文を定家本寄りに改竄していることは疑えない。

ただし、右の改竄したと覚しき箇所を除けば、他は概ね清輔本に一致するかと言うと、これも必ずしもそうとは言えないのである。改竄の痕跡のない箇所でも、清輔本と異なり定家本に一致する例が少なからずある。つまり、本伝本の巻五－十は、清輔本系の本文を有するとは言いながら、もともと定家本本文と混淆した状態にあり、さらに擦消し、改竄によって定家本寄りの本文になっていると言うことになる。

従って、本伝本の巻五－十の本文は、本文研究に資するところが少ないと言わざるをえない。以下にそれぞれの例を掲げるに止め、詳細な考察を行わない所以である。

まず、定家本に擦消し改竄が行われている疑いのある箇所として次のようなものがある。上段が本伝本、下段が清輔本（一部の伝本のみの本文を含む）である。これらの中には、読みは同じでも、表記を改竄した箇所も含まれる。

249　文屋やすひて－ふんやのあさやす、254　もみち葉に－もみちはゝ、257　秋のこのはを－あきの山へを、259　山のこの葉の－山のこのはも、269　この哥はいまた殿上－このうたはまたうへ、同　つかうまつれるとなむ－つかうまつりたりけるなり、272　ふきあけのはまの方に－ふきあけのはまに、298　かねみの王－かねみのおほきみ、309　僧正遍昭－僧正へせう、314　たつた河－たつた山、317　吉野の山に－ふかきの山に、336　まかひせは－うつりせは、344　君かちとせの－きみかいのちの、345　すむちとり君か御代をは－なくちとりきみかみちよを、362　秋くれと－秋なれと、412　つれてこし－むれてこし、421　きるへきに－きるへきを、433　おもはさるへき－うらみさるへき、442　のはなけれはやこゝにしもくる－のはなけなるをこゝにしもなく、異本歌4　みやこしまへの－みやこへしまの、466　そこはしられん－そこはしらなん、468　はをはしめるをはてにて－はをはしめにるをはてにて

一方、改竄の痕跡が複写では認められないにもかかわらず、定家本に一致している箇所として次のようなものがある。

251　哥合しける時によめる－哥合しける時によみける、261　露ももらしを－つゆもゝりしを、306　秋のかりいほに－秋のかりほに、313　たつねもゆかん－たつねもいなん、343　ちよにやちよに－ちよにましませ、352　よみてかきける－よみてかける、356　読侍ける－よめる、369　藤原のきよふ（清生）－藤はら

のきよふん、371　たちなんのちは－たちなん時は、372　まかりけるに－まかりけれは、375　ともかうも－ともかくも、379　くたくたひかな－くたくよひかな、380　まかりける人に－まかりける時に、392　みえなゝん－みえぬかな、393　まうてきて－まうてきけるひ、395　いうせん律師（ママ）－いう仙、397　まかりいてけるおりに（「お」は「を」を改竄）－まかりけるをりに、411　いひけるをきゝて－いひけるをうちきゝて、416　あまたゝひねぬ（正本）－あまたゝひへぬ、422　そほちつゝ－そほちては、433　あふひ　かつら－かつら　あふひ、435　僧正へんせう－僧正へせう、448　からはき－題唐萩、457　いかゝさきちる－いかゝさきくる、468　僧正聖宝－僧正遍照

改竄の有無は原本の調査によって変る可能性があろうかと思われるが、いずれにしても改竄箇所の多さと、それとは逆に元来定家本と一致している箇所の多さから、本伝本の本文は問題点が多いと言えよう。

次に清輔本と一致する箇所を挙げる。今度は下段は定家本である。

249　これさたのみこの家哥合によめる－これさたのみこのいへの哥合の哥によめる（清輔本）－これさたのみこの家の哥合のうた（定家本）、253　又は我かとのわさたもいまたかりあけねは－ナシ、256　いし山のてらに－いし山に、262　神の社のあたりに－神のやしろのあたりを、268　ゆひつけて－むすひつけて、273　いたれりけるを－いたれるかたを、282　籠はへりける時に－こもり侍けるに、293　なかれたるかたかけるを－なかれたるかたをかけるを（清輔本）－なかれたるかたをかけりけるを（定家本）、305　もみちちる－もみちのちる、同　むまひかへて－むまをひかへて、310　よめる－よめりける、313　ぬさにたむけて－ぬさとたむけて、332　これのり－坂上これのり、351　すくる月日は－すくす月日は、356　あつらゑられて－かはりて、巻八部立　別離哥－離別哥、375　すみける人をは－すみける人を、397　きのつらゆきか－ナシ、同　ナシ－つらゆき、398　とよめりけるかへしによめる－とよめりける返し、399　あひ物かたりして－ものかたりして、418　あまの川にいたる－あまのかはらにいたる、異本歌4　みやこへしま－みやこしま、同　わひしきは－かなしきは

以上あらましを見たのみであるが、巻五－十の部分は、本来は清輔本の本文を有していたと思われるが、新院御本との校異を示す朱の傍注を失い、勘物も一部しか存在せず、その書式も

通常の形式を保たないなど、かなり改変されていると思われる。和歌一行書というのも、通常の清輔本ならありえないことである。また、本文自体も右に述べたように、清輔本本文を保っている部分と、定家本本文に改められている部分があり、あまつさえ、本伝本において擦消し改竄が行われ、さらに定家本寄りになっている。なお、改竄の時期は複写では判らない。

原本を精査すれば、さらに明らかになることもあろうが、以上で本伝本の性質のあらましは判明したと考える。[13]

〔注〕

（1）　拙著『六条藤家歌学の研究』（平11刊、53頁以下）。

（2）　本書は井上宗雄氏が某書肆で発見されたものである。家蔵に帰すに当っては、井上氏の御教示と格別の御配慮を得た。ここに厚く感謝の意を表するものである。

（3）　厳密に言うと、保元二年清輔奥書を有する伝本は、尊経閣文庫本と伏見宮旧蔵一本（存巻十一―二十、真名序）の二本のみであるから、この二本により帰納した勘物の特徴に一致する伝本を保元二年本と認定することになる。拙著では、穂久邇文庫本（存仮名序、巻一―十）と金沢文庫本（存巻一、二）を勘物の一致から保元二年本に加えた。以上四本の特徴と本書を比較の結果、本書を保元二年本と認めることとなる。

（4）　伊達家本、冷泉家時雨亭叢書第二巻所収の嘉禄二年本、貞応二年本の三本に異同はない。

（5）　以下取り上げる部分は伏見宮旧蔵顕昭本では欠丁であるので、天理顕昭本が対象となる。

（6）　すでに、浅田徹・五月女肇志両氏編「国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる古今和歌集奥書集成（三）」（国文学研究資料館文献資料部「調査研究報告」22平13・11）に翻刻がある。

（7）　但し、D′の前にある「両帖之本ノ批第十之奥ノ分」の注記の意味はよくわからない。この奥書の記者（行阿）は「批」を「奥書」もしくは「識語」の意味に用いているらしく、H奥書及びJ奥書中の「批」もそう解する他ない。しかしながら「批」をその意味に用いた例を知らない。後考を俟つ。

（8）　拙著211―212頁参照。

（9）　校異の方針五、六において示した貞応本と嘉禄本の本

文の相違や声点注記の方法については、冷泉家時雨亭叢書第二巻『古今和歌集嘉禄二年本古今和歌集貞応二年本』（平6刊）の片桐洋一氏の解題を参考にしている。

（10）　注（9）片桐氏解題。

（11）　拙稿「古今和歌集版本考（続）」（「斯道文庫論集」35平13・2）174頁、「初雁文庫管見」（「国文学研究資料館報」56平13・3）において古今集本文研究の今後の課題として指摘した。

（12）　昭和切もこの歌を463ノ次に置くが、関係あるまい。

（13）　書入れられている清輔本の勘物は、複写が小さく、十分読みえないため、考察の対象から外した。

ただし、勘物の量が少なく、相当省略されていること、片仮名交りで清輔本勘物としては比較的珍しく、その点が永治二年本である宮本家本と同一で、勘物自体も類似している点があることを指摘しておく。また、以上の点から巻五―十部分の本文が宮本家本に類似していはしないかという疑問が生ずるが、本文の改竄という問題もあるが、特に関連は認められないことを申し添えておく。

（追記）　本稿二の一部を和歌文学会例会（平成十四年十二月二十一日、於星美学園短期大学）において「中世における古今集校合の一例―福井市立図書館本をめぐって―」と題して口頭発表した。その際、諸氏より主として奥書の読み方について種々有益な御教示を賜った。一例として、浅田徹氏よりG及びG′奥書を六条有光息の何人かとし、実孝書写本そのものは焼失し、副本が残り、行阿の用いたのはその副本であるとの見解が示された（本稿はG′を有光の再奥書とし、行阿が転写本を実孝書写本と思い誤ったとの立場をとる）。校了時期の関係もあり、当面本稿の解はそのままとして今後の課題としたい。勿論、本稿の解が唯一のものとは考えていない。しかしながら、終了後、佐々木孝浩氏等より、D′奥書で、寛元四年には徳大寺実孝は出生していないと指摘され、あまりの迂闊さに愕然とした。良い案もないままCとDのように、D′の寛元四年奥書と権中納言実孝の署名とを切り離して考えることとする。但し、これで全てが解決したとは思っていない。

（平成十四年十二月二十五日川上記）